

2023年2月

聖句随想・折々の言 (ことば)

『教団新報』からの依頼を切っ掛けに  
クリスマスに感じた「1分間の分かち  
合い」による小さな実り

牧師 森 言一郎

20 …… そのかなめ石はキリスト・イ  
エス御自身であり、21 キリストにお  
いて、この建物全体は組み合わされ  
て成長し、主における聖なる神殿と  
なります。22 キリストにおいて、あ  
なたがたも共に建てられ、霊の働き  
によって神の住まいとなるのです。

(エフェソの信徒への手紙 2章20節)

1. クリスマス直前に入った一本の電話

2022 年のクリスマス礼拝に近い頃、日本基督教団が  
二週間に一度程のペースで発行している『教団新報』と  
いう機関誌の主筆を務めておられる嶋田恵悟先生（茨城

県・土浦教会)から電話が入りました。年が明けてから発行予定の『教団新報』に記事を書いて頂けないでしょうか?という内容でした。

はて、なぜ私が依頼を受けるのだろう、と思いながらお話を聴いていると、「以前、コロナ禍に於ける教会学校の取り組みを記事にしました時に、森先生からお電話をいただき、大きな規模の教会の様子ばかりが取りあげられていて、地方の教会が忘れ去られているようで励ましくありません、とご指摘いただきました。あれ以来、ずーっと気になっておりました…」とのこと。

すぐには思い出せませんでしたでしたが、確かに私は『教団新報』に対して苦言を呈していた記憶があります。記憶をたどって探してみると、2021年12月12日(日)に行った旭東教会・教会学校の教師会での議事の中で、「日本基督教団『教団新報』記事に関する件」を取りあげていました。そして、「地方の小規模・中規模教会への配慮が忘れ去られている大変残念な取材・編集に問題を感じて、『教団新報』と「日本基督教団・教育委員会」に

電話を入れたことを思い出しました。

## 2. 『教団新報』から依頼され、期待された内容

今回の正式な原稿依頼は次のような内容でした。「森言一郎先生 主の御名を賛美いたします。日頃、『教団新報』にご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。新型コロナウイルスの感染が拡大しておりますが、コロナ禍の中でのクリスマス礼拝について、ご報告していただきますようお願いいたします。教会が励まされ、この課題とより深く向き合っていくための視座を与えられれば幸いです。原稿分量・本文のみで11字×70行。写真、活動の様子が分かるもので、掲載可能なものがあればお送りください。」とあったのです。

このようなリクエストに応えられるような何かが、今の旭東教会にあるのだろうか、と様々に思い巡らしながら私はクリスマスを迎えました。そして、クリスマスのささやかな喜びの中で、書き記したのが以下にご紹介する『密になっても大丈夫』という短文なのです。実際に『教団新報』に掲載される時には、編集者によって校正

の手が加わるはずです。12月29日（木）の夜遅くに、少し悩みながら、えいやっとメールで投稿した初稿は以下の内容でした。

### 3. 『教団新報』に私が投稿した内容の原文

#### 『密になっても大丈夫』

コロナ対策が厳しく言われるようになった2021年8月から、旭東教会では、あることを切っ掛けにして「密な信仰生活」を送るようになり始めました。旭東教会の礼拝には2度の報告の時間があります。礼拝の前半部分と、祝祷後の時間帯です。その最後の報告の時間で「1分間の分かち合い」という名の時を過ごすようになったのです。

「密」を礼拝の時間に持つなんて今の時代に逆行しているように見えます。しかし、窓を開ければ換気が確実にできる会堂です。20分毎に5分間の窓開けを徹底し、「1分間の分かち合い」を毎週行っています。

一週の間に関わった喜怒哀楽、お祈りしてほしいこと、分かち合いたいささやかな喜び、失敗談などが、手を上げた人の持つマイクを通じて拡散して行きます。マイク

は聴力に弱さを覚える方への配慮であり、同時にマスクをしていても聞きやすいという利点があります。2人、3人での会話の内容を教会全体に広げるのは難しいものです。でも、礼拝出席している一人ひとりが耳を傾ける時間帯に皆が同時に聴くことができれば、私たちは心の架け橋となる情報を共有できるのです。

教会という場所は個人的に親しくお話をしたことのない方が居られるものです。その関係性を思いがけない形で変えられる時間となりました。今では手が次々に上がる日も少なくありません。週報にお名前を記し、抄録としてその中身を掲載する努力も続けています。お休みの方も後日読むことができます。

クリスマス愛餐会では、黙食していても互いの心の距離が以前にも増して近くなっていると感じたのは、私の気のせいではないと思ったのです。教会は一体感に満ち、笑顔があふれました。「1分間の分かち合い」の力だと信じています。(終)

#### 4. 編集者 Nさんからの嬉しいメール

年が明けて1月4日(水)の午前、編集者のNさん

から、心底ほっとし、記事を書かせていただいてよかったですと感じるメールが届きました。

「森言一郎先生 頌主 今年もどうぞよろしくお願いたします。お忙しいなか、早速に原稿とお写真をお送りくださり、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。コロナ対応をきちんとしながら、人と人との関係はむしろより密にと、弱さを強さに転換されていることに感服いたしました。どうぞこれからもお体に気をつけてお過ごしください。感謝の気持ちを込めて。『教団新報』担当職員 N」

有難い言葉でした。Nさんのようなお立場の方は、通常、「確かに原稿をいただきました。ありがとうございました」程度の事務連絡でメールは済ませるものだと思います。ところが、全く思いがけず、上にご紹介したように、「(旭東教会が) コロナ対応をきちんとしながら、人と人との関係はむしろより密にと、弱さを強さに転換されていることに感服いたしました。」との言葉を添えてくださったのです。

## 5. Nさんへの私からの返信メール

嬉しくなった私は、1月5日（木）の夜、次のようなメールを入れました。

「Nさま 早速ご返信くださり、とても安心しました。全く違う角度で書き直してくださいますか？ などということもあるのかなと、どこかで不安を抱いておりました。励ましのお言葉もありがとうございます。感謝です。教会の方々にも伝えたいと思います。」と。そのようなわけで、この『緑の牧場』にて教会の皆さんにもご報告いたします。

## 6. 「1分間の分かち合い」の力を探る

「1分間の分かち合い」の時間は、今や旭東教会の礼拝の一つの目玉となりつつあるのかも知れません。「こんな時間は無駄だから、もうやめにしましょう」という声はありません。

ちなみに、「1分間の分かち合い」を開始してから一年が経った時点での振り返りを2022年8月14日の『週報』に以下のようにまとめました。6項目あります。改

めて読み直して見ましょう。

- ①教会生活をしているお互いを自然と知ることができるようになった。
- ②お話を聴くと、そのことが次の日曜日までの間に時に思い出され、祈りに結び付く。実際、お祈りをお願いします、というお話もある。
- ③旭東教会にお出でになって間もない方にとって、見も知らない方たちがどんなことを考えているか、自然と知ることができる。
- ④お話を聴いた後のほっとタイムの時に、1分間の分かち合いでの話題がさらに膨らんでいく。
- ⑤個人的にはお話することがない方ともお話できるような場である。
- ⑥翌週の『週報』に要約が載るので、欠席その他で聞きそびれた方も、内容を知ることができる。

以上、マイナスは殆ど見当たりません。これからも「1分間の分かち合い」の時間を大事にみんなで育てて参ります。



## 7. 「伸び代」を求めて新年度に向かいたい

1月の定例役員会で2023年4月以降の歩みをどのように考えて行くのかについて話題にした時、私は「足りないところ、不足を数えるよりも、よいところを伸ばして行きましょう」と言葉にしました。本当にそうでありたいと思います。

新明解国語辞典で「伸び代（しろ）」という言葉調べました。「人や組織について、成長・拡大・発展できる余地や可能性。」とあります。正に、「1分間の分かち合い」は私たち旭東教会のこれからの「伸び代（しろ）」の扉のように思えてならないのです。しかめっ面で悩みながら「1分間の分かち合い」のお話をする方は居られません。実際には、誰もが気軽にできる、ミニミニ証し的な時間となっているのです。

## 8. 「教会論」が語られる

### パウロの言葉を読んでみる

最後に、パウロが記したエフェソの信徒への手紙の2章20節以下のみ言葉を味わって終わりにしましょう。

**20 … そのかなめ石はキリスト・イエス**

御自身であり、21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

過日、創立 120 周年の喜ばしい時を迎えた私たちです。礼拝は教会の要であることは普通に言われていることですが、私たちは礼拝の最後に行っている「1 分間の分かち合い」をますます楽しみ、深めながら、一步一步をしっかりと踏みしめて行きたいものです。

この時間は、旭東教会らしい福音の一粒の種を生み出していく力となっていくと確信し、期待もしています。心を上向きに、少しの努力を続けて参りましょう。(end)